

11 浜田市世界こども美術館

子どもから広がるアウトリーチ活動

1. 美術館の概要

- 開館年： 1996年
運営母体： (財)浜田市教育文化振興事業団
都市人口： 4万7千人
- 延床面積： 3,609㎡
展示室面積： 380㎡
開館時間： 9:00～21:00
(展示室は9:30～17:00)
休館日： 月曜、年末年始
- 運営スタッフ総数： 14名
(非常勤含)
学芸員数： 5名
教育普及担当者数： 5名
(学芸員数、教育普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先：
〒697-0016 浜田市野原町859-1
tel. 0855-23-8450～1
fax. 0855-23-8452
URL:<http://www.web-sanin.co.jp/local/hamada/mcma.htm>

2. 美術館の特色、事業概要

- 次代を担う子どもたちのための美術館として誕生。幼い頃から美術に触れることで想像力を養い、感性を育ててほしいとの思いで、さまざまな展覧会を開催するとともに、創作活動にも力を入れ、「みること、つくること」の双方を充実させるべく活動を展開している。
- 主な収蔵作品(作家)：以下の3つの収集方針に添った作品をコレクションする。
 - コレクション 「巨匠からのメッセージ」：古今東西の巨匠たちが「子どものころに描いた作品」や「子ども心を感じさせる素朴

でユニークな作品」を集めたコレクション(ピカソ、クレー、ミロ、マティス、エッシャール等)

- コレクション 「世界の子どもたちからのメッセージ」：子どもたちの自由な発想に満ちた作品を世界各国から収集したコレクション。
- コレクション 「浜田こどもアンデパンダン」展(国内外の子どもたちの作品を募った展覧会)の出品作品。
- 年間事業費： 5,775万円
(人件費、施設管理費を除いた年間予算)
教育普及予算： 537万円
(上記年間事業費の内数)
- 総入館者数：36,127人(1999年度)

3. 教育普及活動導入の背景、経緯

◎ こども美術館の設立

- 浜田市郊外の丘陵地に、子ども、青年層、高齢者層という3つの世代を対象にしたゾーンをつくりたいという方針から、こどもを対象とした美術館、大学、総合福祉センターという3つの施設の建設が計画された。
- 子どもを対象とした本格的な美術館は、国内にもあまり例がなかったが、名称にはあえて「こども」という言葉を取り入れ、対象が子どもであるという特徴を明確に打ち出した美術館づくりを計画した。
- 建物の設計とソフトは車の両輪であり、設計は美術館で行う活動内容、つまりソフトと平行して検討した。例えば床材は、大勢の子どもを座らせるために、温かみもあり、清掃も楽なコルク材を採用。
- ◎ 子どもを核にした普及活動
- どうすれば、昼間学校に行っている子どもを対



「ミュージアム・スクール」風景

象にできるかを検討した結果、学校の授業の一環として、美術館で鑑賞や創作活動を行なうミュージアム・スクールという教育普及事業を中核とすることにした。

- 美術館に子どもたちを呼ぶことが日常的であり、子どもたちとの関係は学校教育の現場に非常に近い。これが他の美術館との大きな違い。
- 館では、ウイークデイの昼間は、子どものためのミュージアム・スクール、夕方以降は大人のための講座、土曜日・日曜日は家族で楽しめるファミリー美術館と、テーマを決めて、子どもだけではなく、子どもと一緒に来館する大人も美術館ファンになってくれるよう、プログラムを組んでいる。
- その中で、単に作品を展示するだけではなく、子どもたちがより積極的に作品に向き合えるよう、ワークシートやワークショップを取り入れた多彩な教育普及活動を展開している。
- 実施展覧会(1999年度):
 - アンニョンハセヨ韓国: 韓国の子どもたちが描いた約100点の作品を紹介、韓国の文化についての理解を深める
 - ピカソの凸凹版画展: ピカソ芸術の変遷をたどりながら、複雑な版画の技法を学ぶ
 - ミステリー美術館: 世界中の美術館を荒しまわっている怪人がこども美術館に忍び込み、謎を仕掛けたという設定の現代美術展*表参照

4. 教育普及活動の内容と運営

◎ 教育普及活動の構成と内容

- 浜田市世界こども美術館では、教育普及活動として、展覧会事業、「ミュージアム・スクール」、「フリー・ふりー」(子どもから大人まで参加できる身近な素材を使った創作活動)、「パソコン・アート」(オリジナルソフト「パソコン水族館」や市販のお絵描きソフトを用意)、「なんでもワークショップ」(春休み、夏休みに実施する申し込み制の創作活動)といった活動を柱に、子どもを対象とした事業を展開している。
- 現在の美術館を取り巻く環境を考えると、それぞれの美術館が独自のテーマ性を持たなければならない。浜田市の場合はそれが「子ども」。展示と同時に、常に子どもに働きかける「しかけ」を考えている。

◎ 展覧会事業

- 展覧会事業では、20世紀の代表的な巨匠の作品を紹介する一方で、国内外の子どもたちの作品を募るアンデパンダン展や、現代美術作家による体験型展覧会といった多彩な内容を用意。

- 主に子どもを対象にした普及活動のしかけの中心は、ワークシート。
- たとえば、「ミステリー美術館」では、ワークシートを片手に謎を解明していくという設定。この種のワークシートでは、問いかけに対して答えが曖昧だったり、あるいは回答の無いものさえある。当館では可能な限りはっきりとした答えが提示できるように心掛けている。
- ただし、いくら正しい情報や知識だからといって、ひとつの見方を押し付けたり、意味を限定するのではなく、さまざまな視点に立った鑑賞や接し方ができるように留意している。
- ギャラリートークについては、いつでも誰でも知りたいときに説明が受けられるよう、子ども向けのコンピュータープログラム「はまびーくんのギャラリートーク」を設置したが、リピーターの多い当館では、すぐにあきられてしまう面もある。

◎ 主な教育普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
ミュージアム・スクール (1996年度)	<ul style="list-style-type: none"> 市内の小学校(14校、児童数約3,000人)と、幼稚園(6園、園児数約300人)を対象に実施している団体利用のためプログラム。夏休み等を除き、年間を通じて週に2回(水曜日と金曜日)、クラス単位(小規模校の場合は学年単位、もしくは全校一括)で、子どもたちを受け入れている。 1回当たり約30～40人の子どもたちに対し、常に2人の学芸員が対応。午前中の約1時間の鑑賞後、昼食を挟んで、午後の2時間程度を創作活動に充てる場合が多い。 課題は、「新鮮さ」を保つこと。子どもたちは正直なので、鑑賞にしても創作活動にしても同じ説明や内容は許されない。ゆえに学芸員は、常に新しいネタを探し続けなければならない。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	幼稚園・保育園児 小学生	30名/1回	週2～3回	無料	128万円
ミステリー美術館 (1999年度開催)	<ul style="list-style-type: none"> 展覧会名が示すとおり、会場を訪れた子どもたちが探偵役となり、ワークシートを片手に作品に隠された様々な謎を解明していくというストーリー仕立ての展覧会。 最大の課題は、ここでもネタ探し。所蔵品に恵まれない当館では、こうした展覧会を常に外部からの借用品で賄っているが、どんな展覧会を開催するのか、どこから作品を調達(=借用)するのか、どのような仕掛けで見せるか、という3つの難問と常に格闘している。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	幼稚園・保育園児 小学生	7,000名	年4～5回	小・中学生 100円	446万円
アンシャンテ こども美術館 (1999年度開催)	<ul style="list-style-type: none"> フランスから児童美術教育の専門家を招き、日本と韓国の子どもたちが一緒に活動したワークショップ。講師はフランス中部の小都市、サン・ジャン・ド・ブレ市で、市の援助を受けた美術教育機関「ラトリエ」を主宰するコレット・ダゴ夫人ら3人。地元、浜田市の小学生23人をはじめ、ソウルから招いた児童7人が、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」のイメージを再現する活動に挑戦した。 仏・日・韓の3ヶ国語が飛び交う中、「人物は暖かい色、背景は冷たい色」という「モナ・リザ」の基本的な配色パターンに従って制作。常に輪郭線から入る日本式描き型とは、全く異なるユニークな手法と、それに先立つ絵画の見方を学んだ。 2000年度は中国、韓国、フランス、アメリカの4ヶ国から子どもたちを招き、国際ワークショップを開催することができたが、予算的にも労力的にもこの程度が限界との声も聞かれ、今後は1カ国ずつターゲットを絞って、質の高い活動を志向、継続していきたい。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	小学生	30名	年4～5回	無料	300万円



「アンシャンテこども美術館」
国際ワークショップ 風景

- 「子ども」という特殊なテーマの美術館ゆえに、これまでほとんどの展覧会を自主企画、単独開催で実施してきたが、できれば今後は他館との連携を図り、当館のノウハウを活かした共同企画や巡回展にも取り組んでいきたい。

◎ ミュージアム・スクールによる学校との連携

- ミュージアム・スクールは、小学校と幼稚園を対象とした団体利用のためのプログラム（*詳細は表参照）。
- 活動を開始する際の大きな課題に、学校の先生方との連携があった。学校の年間の諸行事は忙しく、先生方はそれが増えることには消極的。そのため、先生方との意見交換を繰り返し行い、ミュージアム・スクールに参加しても学校側の負担が増えない旨を説明した。
- 最終的に、美術館までの足を確保してほしいという要望があり、コスト面・安全面から民間のバス会社に委託することとした。
- 「学校ではできないようなダイナミックな活動を！」と希望する先生が多い一方で、粘着テープ等をふんだんに使うと、「もったいない。環境教育をどう考えているのか」といったお叱りを受ける場合もあり、なかなか難しい面もある。慣れている先生からは、注文や批判もあるが、先生からの声は子どもたちの声だと思って耳を傾けている。
- 現在、ミュージアム・スクールの年間利用者は約1,500人。市内の児童・園児の総数は約3,300人なので、2年に1回程度の割合で、市内のすべての子どもたちが美術館を訪れていることになる。
- 浜田市近隣には他に公立の美術館がないため、ミュージアム・スクールは市外からの生徒も受け入れている。
- 当館の看板とも言うべき事業なので、試行錯誤や調整を繰り返しながら、当面はこのまま継続する予定。

◎ 教育普及活動の広がり - アンシャンテこども美術館（*詳細は表参照）

- 「アンシャンテこども美術館」は、展覧会に連動し、世界の子どもたちが同じ設定のもとで創作活動に取り組み、お互いの文化や風習の違いを学び、理解しあう心を育むために企画された。
- 2000年度は、市と外部の機関（（財）地域創造）からの助成金を得て、中国、韓国、フランス、アメリカの4ヶ国から子どもたちを招き、国際ワークショップを開催した。
- 子どもたちの来日中、2泊のホームステイを企画し、ワークショップに参加する子どもたちの親に呼びかけたところ、当初の心配をよそに、すんなりと受け入れ先が決まった。
- 館の名称に「世界」とついていることから、こうした国際交流事業を継続的に展開していきたい。

5. 教育普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 教育普及活動の実施に伴う効果

- 開館に先立って、市内の小学校に通う子ども全員にアンケート調査を行った（小学校の先生に配布、回収を依頼）。この中で、美術館に行ったことがあるかという質問をしたところ、全体で「ない」が63%という状況だった。しかし、開館から5年たった現在、市内の全小学生が美術館に行ったことがあると回答できるようになっている。
- ミュージアム・スクールを体験した子どもたちが、家族を連れてまた来館してくれるのありがたい。子どもを通じた普及活動は、親にも影響を及ぼしつつある。当市では、子どもたちだけでなく、親にとっても美術館は日常的なものとなってきた。
- 税金により運営されている施設では、その活動

を市民に認知してもらうことが非常に重要。市民の美術館に対する好意的な声が、市長や議員にも届いていることが実感できる。

- 美術館がきっかけづくりをすることによって、地域の人々は自分たちでどんどん動き出すようになる。例えば国際ワークショップのホームステイ先となった家庭では、その後も海外の子どもたちとメールのやり取りをするなど、コミュニケーションを図っており、親の方から「来年はどうするの」といった声も出るようになってきている。
- 最近では、隣接する島根県立大学の学生にもボランティアを依頼して、新しいプログラムづくりを考えるなど、新たな連携の芽が出始めている。アートが日常化し、市民の中に美術館を中心としたある種のサイクルができてくることが理想。

◎ 課題と今後の展望

- 子どもを対象とした事業は、市民の支持を得るための手段としては有効だが、一方で、学校との関わり、予算の確保、人員等、美談では済まされない側面がある。
- リピーターが多いので、展覧会にプラスして新しいしかけを用意していかないと、再度の来館を望めない面もあり、企画面で苦労している。子どもたちと一口で言っても、小学校の低学年と高学年、男の子と女の子はまったく違うし、クラス差、学校差もあるなど、具体的な対応は難しい。
- ワークシートの作成にあたっては、担当者が一人だけではひとりよがりのものができる恐れがあり、また間違った知識を普及しないためにも、相互に意見交換できるしくみが必要。しかし実際には、忙しくて複数のスタッフが関われないなど多くの問題があるのが現状。
- これからの大きな課題は、美術館同士のネットワークづくり。各地域にやる気のある学芸員がいても、小規模館の場合は活動に限界がある。そ

うした館では、予算や人員の面で質の高い展覧会を実施することは難しい。こうした状況を解決するには、「巡回展 + 教育普及活動」を目的とするネットワークづくりが有効。

- 学芸員が教育普及をやりたいと思っても、行政のしくみの中では、下から企画を持ち上げるのが難しいことも多い。ステージラボのように、(財)地域創造のような団体が研修会形式のプログラムを用意してくれれば、小さな美術館でも職員を送り込むことができる。全国には、入館者の確保に苦しむ中小規模の美術館が多いので、そうしたことを通じて、ぜひ各地の美術館の有効活用を図るべき。
- どの自治体も財政が逼迫し、行政改革が進んでいく中、学芸員もプロとしての責任を果たすためには、美術館の社会的な存在意義をアピールするとともに、存続のための新しい提案をすべき。例えば、自ら率先して評価基準を示し、数値で業績を評価できるようにするなど、いわゆるアカウンタビリティ(説明義務)に応える能力を備えていくべきだろう。
- こうした課題に対しては、一館だけで取り組むのではなく、規模や性格を同じくする美術館同士が連携することが必要。そうすれば、徐々に客観的な評価基準もつくられていくであろう。